

パネルディスカッション

「被災地の現状と課題」～いま私たちにできること～

平成 23 年 8 月 21 日（日） 9：00～10：30
前橋市民文化会館大ホール

助言者

災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード理事 鍵屋 一

パネリスト

（被災地の代表者）

22 年度岩手県知的障害特別支援学校 P T A 連合会会長 菊池 要悦

22 年度東北ブロック長 宮城県知的障害特別支援学校 P T A 連合会会長 工藤 史

23 年度福島県立相馬養護学校 P T A 副会長 佐藤 定広

（被災地を訪問した役員）

22 年度関東甲信越ブロック理事 関根 健一

22 年度近畿ブロック理事 前田 正史

コーディネーター

22 年度全国特別支援学校知的障害教育校 P T A 連合会会長 石塚 由江

I 開会

II 助言者、コーディネーター、パネラーの紹介

III 提言

（コーディネーター）

皆さま、おはようございます。

今日のこの日を迎えることができまして、全知 P 連事務局長をはじめ、事務局校の先生方、大会実行委員長、ありがとうございます。また、本日パネリストとして登壇していただきました皆さん、本当にいろいろ大変な状況の中、資料を作成していただき、あらためて感謝申し上げます。

今日のこのパネルディスカッションが会場の皆さまにとって何かしら心に残るようなものになりますよう、私もコーディネートしてまいりたいと思います。大変緊張しておりますが、元気の良い鍵屋先生がお隣にいてくださるので、今は豊かな気持ちでいれます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、被災地の当時の状況と今後の対応ということで、岩手県、宮城県、福島県のパネリストの皆さんから、お 1 人 10 分程度でお話をさせていただきます。よろしくよろしくお願いいたします。

（菊池氏）

おはようございます。ご紹介いただきました、平成 22 年度岩手県の県知 P 連で会長をしておりました菊池と申します。

10 分ほどということで、だいぶはしょった内容になるかもしれませんが、当時の状況を含めてお話を申し上げたいというふうに思っております。

まず、私は平成 21 年度、そして平成 22 年度、花巻清風支援



学校のPTA会長ということをやらせていただいて、その学校のPTA会長が、自動的に県知P連の会長の当てる職ということもあって、当時県知P連の会長でもあったこともありまして、この春に子どもが卒業したんですけれども、この会場にパネリストとして呼んでいただきました。大変ありがとうございます。

私自身は岩手県の内陸部のほうにおりまして、直接地震の被害を大きく受けたわけではございません。停電等が3日、4日続いたぐらいで、沿岸部の方に比べれば、被災という分では非常に少ないほうだったというふうに思うんですが、たまたま私はその日、勤務でして、JRの盛岡駅という駅に勤務をしているんですが、勤務中に地震が起きまして、その日帰れないというような状況になりました。帰ったのが、2日後のお昼ごろにうちに帰ったわけなんですけれども、先ほど言いましたとおり、幸い、家自身も被害はなくて、それはそれで良かったんですが、いかんせんガソリンが全然手に入らないという状況の中では、ガソリンの確保に非常に困難を強いられたという状況でした。

それは、岩手県に限らず、被災地を含め、あるいは全国的にそうだったかもしれませんが、3月の中ごろということで、ちょうど卒業式の時期だったものですから、卒業式も当然、震災によって延びたわけなんですけれども、ガソリン事情によって卒業式に出席できないという子どもさんも現実にはいたということについては、その燃料事情が非常に悪かったということも含めて、残念だったなというふうに思っているわけでありまして。

その被災を受けて、県知P連としてどうしていこうかということで、取りあえずは被災をした沿岸部の支援学校を訪問しようということで、5月10日に、気仙光陵支援学校、釜石祥雲支援学校、そして宮古恵風支援学校と、3校の学校を回らせていただきました。もう既にその時点では、私自身は現在の県知P連の会長と交代をしていたわけなんですけれども、特別に便宜を図っていただいて、その3校を回らせていただくことができました。それぞれ回ってきて、それぞれの学校から話を聞きました。

気仙光陵支援学校においては、卒業生を含めて生徒2名が被災で亡くなったというようなこと。あるいは、学校に自家発電機があって、それでいわゆる電源については確保できたけれども、例えば備蓄の食料の問題とか、あるいは毛布の問題とかについては、まだまだ課題が残っているというようなお話も頂きました。

あるいは、釜石祥雲支援学校にお邪魔した際には、釜石の祥雲学校というのは釜石市内でもどちらかというと山のほうにあるもので、津波については被害を受けたわけではありません。ガスもプロパンガスを使っている関係で、食事を出すこともできた。たまたまそのときは調理教室みたいなものを開いている関係もあって、地震が起きた際でも供食ができたということが不幸中の幸いであったというような話をされておりました。けれどもご案内のとおり、避難所に行って、障害を持った子どもたちがなかなか避難所になじめないという部分もありまして、幾つかの家族が釜石祥雲支援学校の裏側の土手側にあります「いこいの家」というところに、家族ともども避難をしてきたというような話もされておりました。行政の支援について、やはり震災当初はなかなか手が回らないというような状況もありました。けれども釜石については、保護者のほうから野菜等の差し入れがあって、食料については確保できたというような話もされておりました。

それから、宮古にも行って来たんですが、宮古についても、非常に高台にあって津波自身の影響は受けておりません。ただ、国道45号線から宮古の恵風支援学校に行くまでの道路については、まさに崖っぷちを走るような状況で、たびたびそこも落石が起きるというような道路でありまして、その地震に伴っての落石の心配ということも先生方の話としてありました。なおかつ、宮古の学校の地形的な状況もあるんでしょうけれども、ラジオが聞こえないというか、難聴地域であるということで、携帯も当然通じませんし、ラジオも受信できないということで、まさに情報が全然耳に入らないと、情報がつかめないというようなことがありました。したがって、後ほど触れるかもしれませんが、そうした難聴区間の解消と言いますか、情報をいかにつかんでいくのか、そういう状況をやはりしっかりつくっていかなければならないというふうに思っております。

岩手県の県知P連として、6月から7月にかけてアンケートを取り組みました。お手元のほうに集計結果を資料として出しておりますので、そちらのほうをご覧いただきたいというふうに思いますけれども、震災を受けて何をやっておくべきかということについて幾つかそこに書いてあるんですが、一つは、やはり私たち自身もサポートブックといいますか、そういうものをきちんとつくっていく必要があるんじゃないのかなということが、このアンケートからも読み取れるんじゃないのかなというふうに思っています。昨日の鍵屋先生のお話の中で、SOSというものが紹介をされましたが、あそこまで厚くはないにしろ、子どもたちの状況といいますか、あるいは住所氏名を含めて、そういうものをきちんと紙で残していくということが必要なのではないかなと思います。アンケートにもありますけれども、自分の名前を言えないという子どももたくさんいるわけです。あるいは住所もそうですけれども、そうした部分を含めて、サポートブックというものの作成充実が非常に大事なんじゃないかなというふうに思います。

それから、学校側に望むということでは、災害時における特別支援学校の避難所化ということがアンケートからも読み取れるんじゃないかなというふうに思います。先ほども言いました、避難所に行っても、なかなかゆっくりできないといいますか、なじめないといいますか、親の精神的なストレスも非常に強い中では、やはり慣れ親しんだやっぱり支援学校のほうに避難所として求めたいというような声があるのは当然だろうというふうに思います。

ただ、そこで考えていかなければならないのは、教職員もやっぱり被災者であるということをしかりと、そこを前提にしていかなければならないというふうに思うんです。現に、宮古、あるいは釜石、気仙の先生方の中にも、やっぱり被災をされた方というのは当然いらっしゃるし、そういうことも踏まえながら、学校の避難所化を求めながらも、やっぱり教職員の実情についても、十分そこは配慮していく必要があるんじゃないかなというふうに思います。

また、学校におけるハード対策ということでは、先ほども言いましたけれども、通信手段の確保とか、あるいは自家発電機とか、非常用の飲食物の備蓄・増強と、そうしたことが求められるんだろうというふうに思います。とりわけ、情報が入らないということについては、これは早急に改善をしなければならぬ課題だというふうに思っているわけです。したがって、例えば衛星電話等々も含めて、検討していく必要があるんじゃないかなというふうに思います。

そしてまた、PTAとして、じゃあ何をしていくのかとなった場合に、学校から保護者へのメールの一斉送信、そういうふうな状況をやっぱりつくっていく必要があるんじゃないかと。今日、個人情報保護という形の中で、なかなか親同士のといいますか、自宅の電話番号さえオープンにできないような状況の中では、PTA活動自体についても、それが妨げになっているというふうに私は思っているわけですが、やっぱり情報を学校からもスムーズに提供してもらおうというためにも、メール等の活用というのは非常に大事なんじゃないかなというふうに思っています。しがたって、そういう学校から保護者へのメールの一斉送信のシステム、そういうものをつくっていく必要があるというふうに思います。

そしてまた、先ほど言った避難所の中で、やっぱり障害のある子に理解をということは、これは親として当然だというふうに思いますが、地域の中で私たちはなかなかかわり合いをつくれてきていないという状況の中では、一方的にそういう思いを募らせても難しいんじゃないのかなというふうに思います。例えば小学校から支援学校に入った子、あるいは中学校から支援学校に入った子、そうした子どもたちは、小学校の子ども会、あるいは中学校の子ども会、そこにはなかなかかわりきれない。それが、私の地元の岩手県ではそういう状況にあるわけでありまして。したがって、そういう中では地元の子ども会ともかわりきれないことは、その地域にそういう子がいる、こういう子がいるということがなかなか伝わりきれない、広がりきれない。そういう状況の中では、避難所に行っても「この

子、どこの子？」というような状況になっているのが現状なんじゃないのかなというふうに思います。

したがって私たち自身が、その地域の中で声を出していく、情報を発信していくということが求められているんだろうというふうに思います。それがまた、PTAの任務の一つでもないのかなというふうに思っています。現状についてお話をしてみました。今現在、岩手県では4,635名が亡くなって、2,022名が現在行方不明というような状況にあります。5,092名が避難生活を今現在も続け、約880名ほどが仮設住宅等に入っている状況の中で、まだまだ復旧復興ということについては課題が多いというふうに思います。けれども、昨日のお話にもありましたけれども、この大震災と同じような地震がまた起きるかもしれないという状況の中では、それに備えていく必要もあるだろうというふうに思います。

そうした意味でも、今日のこのパネルディスカッションの中で、私自身も学んでいきたいと思えますし、とりわけ全知P連の仲間の皆さんの支えということは非常にうれしいものだというふうに思います。実は震災の2日後あたりに、石塚会長のほうから「大丈夫ですか」というメールを頂きました。非常にありがたく、気にしてもらっているんだなということで非常にうれしかったですし、この群馬県大会についても、開催をどうすればいいのかという相談でもメールを頂きました。私は、全国の仲間が集まるのが、いわゆる被災者の支えになるんだから、ぜひやるべきだというようなことを返したというふうに思っています。したがって、繰り返しになりますが、お互いに学びながら、次の防災のために何をしていくのかについて考えたいと思えます。

以上、とりとめのない話になりましたが、現状について、以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございました。岩手県全体の被災地の状況を、学校を訪問しながら、現状で見たものを伝えていただきました。また課題としては、サポートブックの作成の必要性や、情報のメールの一斉送信が必要なのではないかな。あるいは、子どもたちが「この子、どこの子？」と言われないう、情報を伝える、あるいは、PTAが「こういう子どもたちがここにありますよ」ということを皆さんに知らせていくという、理解・啓発も必要なのではないかという、今後の発展的な課題もお伝えいただきました。ありがとうございました。

それでは、宮城県の工藤さん、お願いします。

(工藤氏)

平成22年度東北ブロック長を務めておりました、宮城県立光明支援学校PTA会長の工藤と申します。よろしく願いいたします。

お手元のところに、資料と言えるほどの資料ではないんですけども、今回参加させていただくにあたりまして、こういった席上に上がりますと私も見てくれ以上に緊張しますので、多分言いたいことの半分ぐらいも言えないかなと思えましたので、ここに送り出していただいた、その力を頂戴した県内の各支援学校の皆さまと打ち合わせというか、話し合いをさせてもらった中でまとめて、「工藤さん、申し訳ないけど、これだけは忘れないで言ってこないと、あんた、戻ってきちゃ駄目だよ」というものをまとめさせていただきましたのが、この資料ということになっております。なので、こちらのほうをちょっと基に、当時の状況を踏まえながらお話をさせていただければと思います。

私、仕事としては老人ホームのほうに勤めておまして、居住地は仙台なんですけど、そのときには仕事場、30kmぐらい離れたところなんです。そちらの片田舎で仕事をしてお



りました。地震があったときには、3分間の揺れというのは本当にもう想像ができない、なので何が起きているのかわからない。本来であれば、伏せていたり、机の下に入っ
てなきゃいけなかったんでしょけれども、仕事柄というか、体は勝手に動いちゃうんです
ね。建物の中を歩き回って、動き出してしまう車いすを押さえたり、窓が急にガタンガタ
ン、ガタンガタン動きますので、そういうのを押さえたりしながらやっていました。パッ
と見ると、私だけかなと思ったら、他のスタッフも同じようにして、意外に平静に歩いて
動いているので、「おまえら大したものだな」と思いつつも、「もうちょっと自分の身を守
れよ」なんてことを後になって思ったところですよ。

そういったことで地震が起きましたので、先ほどの菊池会長のお話のとおり、即、自宅
には戻れなかったんですね。私のほうの資料の中でも、既に余談に入っちゃうところが私
らしいんですが、余談2のところなんですけれども、僕のところは、長男が療育手帳Bの
知的障害、次男はまあまあ元気で、3番目が難病というやつですね。なので、知的障害に
対する配慮と、医療的な配慮、この2つを併せ持ちちゃった状況なんです。読んでいた
だいたとおりになんですが、妻がその状況の中で非常に頑張っていたいただきました。

私の家を救えたというか、そのとき大丈夫だったのは、ここにも書いてあるとおりにな
んですが、非常にシンプルな取り決めをしていたよと。家族内で、自助として非常にシンプ
ルな取り決めをしていた。これが被害が一番少なかった原因なのかなということの後で思
っておりました。被災というほどの被災ではなかったなと今は思うんですが、やはりその
とき病院に移動するというだけでも、救急車を呼ぶだけでも大変でしたし、停電になって
しまうと、本当に信号がつかなくなってしまいますから、われ先にというほどではないん
ですけれども、非常に危険な道路状況になるということには変わりはありません。でした
ので、その中を縫うようにして走る救急車で、うちの家族は病院まで行きました。

そのとき私と妻は、もう情報がとだえておりましたので、もともとしておいた約束をベ
ースに、お互いが自律的に、律するほうの自律ですけれども、自律的に行動をしたよとい
うところがあります。僕のところではそれで何とかかなりましたけれども、もしかしたら各
ご家庭でそういったシンプルな取り決めというのを再確認していただくことによって、受
けなくてもいい被害を減らせるのかなというふうには感じました。

また元に戻るんですけども、今回まとめさせていただいた中では、本当に最初に結論
ということにはなってしまうんですけども、どのような名称であれ、どのような制度を
活用するのであれ、障害児者が利用をためらうことのない避難所、そういった運営方法が
確立できないかなと、予算立てがちゃんとできないのかなと。そういうことをきちんとし
てこれからの災害に備えないと、まずいよということになります。

例えば、制度としては福祉避難所というのが現行法でございますけれども、そこの中
での矛盾点や問題点というのも当然あるかなと思いましたので、あえてここでは福祉避難所
という制度では考えていませんでした。ただ、少なくとも目的としては、障害児者がはじ
かれぬ避難所を確立する、ただその1点のみでございます。

というのも、「なぜなら」というところで下に書いてありますが、特別支援学校に関しま
しては、本当にハード、ソフト、非常に潤沢であります。これを活用しない手はないんで
すよということになります。これを考えたのが7月ぐらいでしたけれども、昨今、新聞の
ほうにも同じような内容の記事が県内では見られるようになってきました。全国的にもそ
ういった動きがあるよということでは聞き及んでおるところでございます。やはり特別支
援学校が持つそのポテンシャルを、どのぐらいうまく使えるのかなということが、これか
らの災害に向けての取り組みということにはなってくるんだろうなと思いました。

やはりそこら辺を裏付けるというか、そういうふうな考えに至る原因としましては、当
時の避難所の状況というのがやはりあるわけなんです。先ほど来菊池さんのほうからも
出ていますが、一般の避難所が本当に障害児者にとって適正な避難所であったかと問われ
ると、実際にはそうじゃなかったんですね。中に入っていた人たちが、じゃあどれだけ邪
険に扱ったかのかと言われると、そうでもないんです。ちゃんと丁寧に見ていただけの人、

親切にやってくれる人、いっぱいいました。高齢者がヨタヨタと来れば、ワッと抱きかかえて、何人かで真ん中に運んでいってくれる、風の当たらないようにどうぞ真ん中にお入りくださいよというところもありました。

ただ、やはり想像を絶する大震災、規模が大きい場合には、それでは事足りません。なので、その一例ということで書いてありますが、電動の車いすですね。自立生活をなされている方が、近所の避難所ということで、体育館に行ったところ、もう既に入れないよと。当然ですね。1,000人収容できるところに、1,500人も2,000人も行っているんですから。そんなところに、大柄な電動車いすで入れますかといったら、当然、当の本人が、「じゃあ、僕戻ります」「私戻ります」というふうになってしまいます。本人が入れなければ、当然家族も入れません。

ここで残念なところだったのが、本来は避難所に登録しなくても、例えば支援物資とか、そういうのは頂戴できるはずだったんですが、なかなか運営のドタバタというのは難しいところで、「いや、うちの避難所に入っていない、登録していないんだから、渡せないよ」とか、そういった押し問答というのが散見されたわけなんです。なので、今日も私どもの応援に来ている、鶴谷支援の会長の方にも教えていただいたんですが、発達障害を持っている児童とその保護者が少しでも落ち着ける環境を求めて、結局車中泊を強行せざるを得なかったんですね。プライベートな空間をつくるのに、車というのは非常に有効だよというのはわかるんです。それしか手はなかったんだろうなと思うんですが、でも、結果的にそれは、避難所に他の家族を送り込んで、支援物資をもらえるような手立てをしなきゃいけない。家族を二分しなきゃいけないという、非常に高いリスクを払う結果になったんだということにつながっています。本当にご苦労なされたなというふうに思います。

自宅、僕の家もそうなんですが、ぱっと見、何ともないよというようなところでも、やはり倒壊の危険性があるとか、その危険性がある、ないじゃなくても、やはり余震におびえるというのが非常に大きいファクターでした。通常の水害とかも大変ですけども、地震の場合、やはり今も続いております余震、これが気持ちの上で大きなダメージを残しますし、引きずる結果になっております。そういったときにでも、安心できる場所、避難所、そういったものの運営ができれば、なんぼかでも落ち着ける空間としてできて、気持ちのダメージは少なく、回復がより早まったんじゃないかなといったようには考えます。

当時、特別支援学校の状況に関しまして言えば、学校の先生方は本当に皆さん、自主的に集まったんですね。自主的かどうかまでは、ちょっと聞かないところもありますけれども、本当に学校の先生方、頑張ったんです。バーツと集まってきて、電気が来ない学校の中で、書類がもうあちこちにひっくり返っている中で、データを拾って、子どもたちの場所を探り、仙台の場合ですと、そんなに広くはないといえども、実はかなりの坂がありますので、そんな中を自転車をこいで、3日やったら5キロ減りましたというような先生もいるぐらいでして、毎日何十キロとなく歩いてたり、自転車を使って生徒の安否確認に動いていただきました。

何でこんな話をしているかという、そういった先生方の気持ちというか、職業柄から来るプロの気持ち、それだけでは割り切れない部分もあるんでしょうけれども、そういった力をちゃんと使わなきゃいかんんじゃないかなというところも感じた次第であります。どこまでもどこまでも、おつかぶせる気はないんですね。ただ、もともと持っている力をきちんと引き出せる環境を整えたいよと。そのために、これからちょっと考えて動かなきゃいけないんじゃないかということは今のところは考えております。

たればになっちゃいますけれども、本当にそこに備蓄があって、救援物資の供給ラインに組み込まれてさえいれば、特に障害を持つ者の支援拠点としての中核機能が例えばあらかじめ設定されておったとしたら、今回どこまで力になったんだろうなということを考えるときがあります。やはりライフラインの途絶えた孤立した自宅、狭い車内、本当にいつ来るかもしれない余震におびえながらというのは、もう気持ちが折れます。今もそうなんですが、心臓がキューッと痛くなっちゃうんですね。今になってやっぱり出てきます。

本当にそういったダメージ、もしかしたら回避できたかもしれませんし、いくらかでもやわらげることができたし、回復が早かったんじゃないかなということと考えます。

1カ所のところ、例えば特別支援学校を避難所的運用をしたいよということ考えたときに、それは特別支援学校に通う生徒さん、先生、保護者、例えばそういったことだけに限定すべきではないのかなというところで、今のところはちょっと考えていました。というのも、特別支援学校を卒業されたお子さん方だって、当然自立をした生活を営むためには、その学校の周辺で1人でお暮らしになっている場合があるんですね。そういった方々に対しても、やはり避難所としてはきちんと解放できる、障害児者にとっての解放された避難所であるよというところが大事なのかなというふうに思うところがあります。

本当にそういった潜在能力を非常に強く秘めた特別支援学校でありますので、その中の高い専門性を持った先生方のそのときの力も含めて、まず最初の結論のところ本当に戻るところなんですけど、特別支援学校を中心とした障害児者が利用をためらうことのない避難所、それを支える運用の制度、予算、お金というところになってきますが、そういったものは是非この大会の中で皆さまのほうにお考えいただいて、お持ち帰りいただいて、声となって挙がっていけば非常にいいのかなというふうに考えました。

もう一つだけあるんですね。そういったある種、急性期と僕、勝手に例えちゃうんですけども、震災発災後の本当にごちゃごちゃとしたときにはそういった避難所はとても大事なんですけど、その後の、これも僕が勝手に命名しているんですけど、耐乏期と言っているんですけど、今回初めて、ものが食えないという経験をしたんですね。パッと見渡したところ、戦争後の食事が無いよという時代を生き抜いた方はどうも見受けられませんので、豊かな時代を共に生きてきた人々なんだなと思って見てはおりますけれども、初めて「今日のご飯、どうしよう」というところになりました。そういった時期がある程度過ぎてきたときに、今度は、やはりスーパーマーケットにもものが無いよということになりました。

実は供給ラインは、ガソリンの復旧、あと優先的にトラックとかへのガソリン供給の始まった時点でかなり改善はしていたと聞き及んでおります。ただ、一度空になった自宅の冷蔵庫を満たすために、当然のように皆さん、買い占めるといって、普段買う倍の量を買っちゃうんですね。それをどんどん冷蔵庫に入れるし、倉庫にためるし、押し入れに入れておくよと。そうじゃないと、とてもじゃないけど安心できませんとなっちゃうんですね。僕自身もそうでしたけれども。となると、いきおい、一つのお店で買うためには、そこに長時間並ばざるを得ないという状況になります。

ここにも書いてありますが、余談1のところにかかせていただいたんですけども、本当に、僕の家もそうですが、自宅に知的障害の子がいて、さらに病気の子がいて、家にこの2人を置いて買い物に行けますかという、行けないわけなんです。その買物をどうするかというのが、とても大きな困難でしたし、それが非常に長い時間続きました。

昨日、鍵屋先生のほうから出た、BCPの中での学校の再開ということの本当にニーズとしては、ここも大きくあるのかなと思いました。学校が再開されることによって、子どもたちは学校に通えます。学校に行くことによって、子どもたちの気持ちはどんどん安定すると思います。それと同様に、保護者の方々は、今度は自分たちの生活再建、そこに力を傾けることができるようになるわけなんですね。僕のところでは近所付き合いがたまたま良好だったというところがあったので、そこでお隣の方が「倍買ってきてあげたから、はい、どうぞ」とか、そういったことで何とか過ごすことができましたけれども、本当に酷なというか、不適切な言い方になっちゃいますが、今回生き延びましたが、もし次、同じ地震があったときに、何も対策を打っていなければ、僕は生き延びる自信がないんですよ。僕らの家族をちゃんと生き残らせられる自信はないんですね。それは何も、津波が来たとか、家が崩れただけのことじゃなくて、本当に普段の自分の暮らしをする上で、買物をすることすらできなくなる恐れがあるからなんですね。目の前に、ちょっと500m行けばスーパーがあって、そこで買物ができるのに、買物ができずに非常にひもじい思いをするし、場合によっては薬が来ないかもしれないからね。そういったところがあり

ました。なので、特別支援学校が福祉の避難所としての力を持つ、それと同じように、学校がより早期に再開される。この2つがかみ合うと、障害児を持つ保護者の方々、またその家庭は、生活の再建も非常に早くなるのかなという考えを持ちました。

ちょっと取りとめのない話で本当に恐縮ではあるんですけども、私たちとしては、今そういったことも含めて、一番最後に自分らでできる災害時の緊急時の備蓄の計画ということでも、資料として載せてあります。「続けないと、こういうのは駄目なんだよね」ということもありましたので、複数年次にわたって、僕は今年で地元の学校の会長は卒業になっちゃうんですけども、僕以外の方々がやってもわかるように、続けられるようにということで、長期的な計画を立てましょうということでもやらせてもらっております。1校の取り組みですし、「既にこういうことはやっているから、何だよ」というところもあるかもしれないけれども、もし参考になるのであれば、見ていただければと思います。以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございました。工藤さんからは、自助、共助、公助という、災害に対する基本的な行動の「自助」というところで、普段から家族での決め事をしていることで、被害を受けなくてもすむことは食い止められるんじゃないかという、大変基本的ですけども、大事な話を頂きました。また、特別支援学校の持っているポテンシャル、特別支援学校が福祉避難所として活用できるのではないかと。昨日の鍵屋先生のお話にもありました、特別支援学校のBCP計画にもつながっていくと思います。(また後でお話いただけるかと思いますが、)ありがとうございました。

それでは、福島県の佐藤さん、よろしくお願いたします。

(佐藤氏)

こんにちは。福島の相馬養護学校の副会長の佐藤です。

会長が社協職員で、ボランティアセンターの会長をしまして、かつ、副会長が今、福島市のほうに避難しています。それで私は、代理の代理ということでやってきました。

資料をお渡ししておりますので、そちらを中心に進めさせていただきたいと思います。

皆さん、原発から50キロ圏内にいらっしゃる方はいらっしゃるでしょうか。今、100キロまで影響が出ているので、その影響が出るという和多分、北海道の東側以外はほとんど入ってくると思うので、原発事故は人ごとではないと思います。

1番目の資料は「相馬養護学校と富岡養護学校の震災後の動き」です。相馬養護学校の校長先生と、富岡養護学校の校長先生から、情報提供していただき、それに私が付け加えて、時系列的に書きました。

福島県の海側は、「浜通り」と言って、浜通り側の北側に相双地域があります。相馬養護学校と富岡養護学校があります。相馬郡には、飯館村もあります。双葉郡には、第一原発のあり、浪江町には、DASH村がありました。

3.11に地震が発生し、津波が起きました。そのとき、建物の被害はあまり大きくはなかったんですけど、翌日、津波が発生してとんでもないことになっているというのが後でわかりました。

資料の中の、(相)(富)というのは、相馬養護学校の報告と、富岡養護学校の報告です。相馬養護学校の報告で、高等部1名の方が亡くなられ、保護者2名が死亡。建物被害は全壊が10棟です。その高等部の方は、家ごと流されて、家族と一緒に重なって亡くなられたと話を、それを助けに入った同じ高等部のお父さんから、卒業を祝う会でその話を聞いた時は、言葉がありませんでした。



地震発生後、ライフラインがストップしました。相馬市の北にあるJRの新地駅は、津波の被害で、駅舎ごとなくなっている状況です。津波のため、海岸付近の住宅が、基礎以外何もない状態で、集落は景色ごとなくなっています。船、家屋、人は3~4キロ流されて、自衛隊、消防、警察の方が捜索を行いました。南相馬市の一部は、警戒区域があり、中に入れず、避難指示が出たので、津波の被災現場に捜索に入っていけないという状態もありました。

その後、原発事故が発生しました。双葉郡、南相馬市の20キロ圏内の警戒区域の方が避難しました。南相馬市は小高区が警戒区域、原町区が緊急時避難準備区域、鹿島区というところが30キロ圏外です。双葉郡の方は飯館村方向に国道が走っているので福島方面、二本松のほうに避難されていました。その避難のときに、放射性物質が付着しているのではないかということで、来ないでくれとか、入らないでくれっていう差別を受けた話もありました。

原発から20キロ、30キロ圏内に屋内退避指示が出され、南相馬市の人口は、おおむね7万人ですが、1万人になりました。そのときに残された方1万人は、逃げられない方で、家族にお年寄りがいて逃げられないとか、障害を持った方が取り残されたというのが現状でした。

数日後、国が屋内退避指示を出しました。自衛隊は、市が作成した緊急時避難援護者名簿に基づいて避難計画を作成したのですが、65歳以上の方が対象で、障がい者は漏れていたんですね。

「障害者が抜けているぞ、どうするんだ」という話になり、被災地障がい者支援センターふくしまと地元のNPOが、市に療育手帳の名簿をもとに、約1,000名に対して避難計画と生活実態調査を行いました。また支援物資の配給も行ってきました。

学校関係で言うと、今、富岡養護学校の方たちは、県内外に避難しています。南相馬市の緊急時避難準備区域というところは、要介護者と子ども、病人は入っていけないとされている区域ですが、南相馬に6,000人児童のうち、約2,000人の子どもたちが残っていて、区域外の鹿島区の学校にバスで通っています。1校の中に7校ぐらい入っている所もあります。一時、支援学級の子たちが体育館の準備室に入っているという状態もありました。

支援学級の子たちの中には、保持していない方もいて、発達障害を持たれている方が支援を受けにくい状況にあります。福祉の人が、学校にもお願いしても、名簿は出してもらえないし、教育委員会に出しても同じです。支援する側は、物資や人をつなぐ情報を伝えられない、というジレンマがありました。出す方の立場から言うと、出せないというのはわかっていたんですけど、ちょっと歯がゆさを感じました。

その当時の事で言えば、発達障害の2人のお子さんがいて、お母さんが困惑して、何をやっていいかわからないという状況の人だったり、食料さえ入手困難な状況で、お父さんと障がい者が2人でひたすら耐えて生活していることなどがありました。支援が何も行われていない状況だったです。障がい者福祉は、NPOが市から委託を受けてという形で動いているんですけども、本来は本当はこれは誰がやるんだろうなというふうなところが、本当に持ち帰っていただきたい課題だと思います。

4月になって学校や仕事が始まって、戻ってきた人たちがかなりいて、今、7万人のうち4万5,000人ぐらいになりました。学校が始まったのに、放射性物質が高くなって児童デイサービスが閉鎖された事業所もありました。親にとって本当に耐えなければならない状況がすごく出てきて、対応に迫られました。

次の資料ですが、県の特別支援学校、養護学校にアンケートを取っていただいた資料です。相馬養護学校の校長先生にまとめて頂きました。

原発事故に風評すること。福島から避難した人もいること、放課後支援がSOSであること、保護者の負担が大きいこと、生徒の安全を確認することなどです。

安否確認の方法も大事です。今回、メール等が有効に活用できました。

障がいを持つ方だからこそ、避難の時も、地域のつながりも大事です。民生委員さんだったり、区長さんだったり、社協さんだったり、市の福祉課だったり、そういう人たちのネットワークが、生活を支えてくれます。

サポートブックに関してですが、南相馬市の自立支援協議会の発達部会が作成していて、県外に行ったときに役だったという話がありました。

次の資料は「被災地障害者支援センターふくしま」が南相馬市の障がい者の調査した時のまとめです。全国からのボランティア 350 名が調査に協力してくれました。

事故の発生から避難までの問題点です。障がい者は、避難所に避難ができない理由があります。移動が困難であったり、避難するときにも必要な支援があり、なぜ避難できなかったかの資料に理由を載せています。

避難所へ行ったものの自宅に戻る必要があり、戻ってこられる人や、避難所から避難所へ何度も移動した人、それは放射性物質から離れていく感じで、かなり皆さん苦勞されていました。

親戚等に避難された人もますが、プライバシーの問題からか、気まずくなる場合もあるそうで、親子でもけんかして帰ってきた人の話を聞きました。今では仮設住宅が建っていますが、ここでも問題があります。今後、新しい住宅ということになると思います。でも今は、また戻ってこれるかどうかわからない状況です。

南相馬市の支援をしてくれた「被災地障害者支援センターふくしま」が、避難時の問題や避難生活についてまとめてくれたので、紹介します。

チェックシートがありますが、最初は避難計画をつくるために作ったものです。皆さん、生活が成り立たない状態でした。移動手段はないし、食べ物はないし、ギリギリの状態でした。今後の大きな災害時のために、避難計画とかの参考にはなるのではないかと、お借りしてきました。次の資料は、障害児の療育等支援事業のアドバイザーの方から頂いた資料です。

最後に、被災して、私たちの住む地域が、とても大変なことになり、全国の皆さんから支援を頂きました。ありがとうございました。こんな状況で、人とのつながりができ、励まされたり、希望を持つことができました。私も障がいを持つ子どもの親ですが、障がいをマイナスとせず、今では「生まれてきてありがとう」というような気持ちがあります。今回、被災した事が、新しい価値観、自分の生き方を考えさせる機会になっているのだと思います。以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございました。佐藤さんからは、支援者としての立場からもお話しいただきました。地元の南相馬の自立支援協議会でサポートブックに取り組み、役立っているということをお聞きしました。このあたりはSOSカードとのつながりもあるかなと思っています。被災地の代表の皆さん、現状の報告、課題、ありがとうございました。

それでは、被災地に、全知P連の理事としてお二人の方が被災地調査をしておりますので、関根会長からお願いいたします。

(関根氏)

今回の、このパネリストという立場を頂いて、何となくというわけではないのですが、全知P連の代表として調査に出させていただいた以上、ここで報告する義務があるということで、いったんお受けはしたのですが、日が近づいてくるにつれて、直接的な被害のない我々がこの場で何か言うことが適切なのかどうかということを、すごく悩みました。というのも、やはり被災地に出向いて5日間見てきたのですが、帰ってきてから、本当に恥ずかしい話ですけど、涙が流れ、『あのがれき一つ、片付けずに帰ってきた』とい



う自責の念がすごく感情としてあふれてきたんですね。そんな気持ちもあったので、コーディネーターの石塚顧問に、そういうことをぶつけたところ、「被災地の当事者じゃない立場だから気づくことがあるので、それをきちんと素直に話してくれればいい」ということで、この場に出させていただきました。直接被害に遭われた方には不適切な発言等もあるかもしれませんが、その辺は前もってご容赦いただきたいと思います。

まず、被災地の調査に行った経緯というのを簡単に言いますと、報道でもありました大槌町に友人がいて、本当に2日間、3日間、安否がわからない状態が続いて、無事だということを知って、すぐにでも駆けつけたいという気持ち、またそれと同時に、被災地の学校がどのような被害に遭っているのかということがすごく心配していたので、その経緯から、大槌町に行きながら被災地の学校にお見舞いを申し上げに行きたいと全知P連に相談したところ、全知P連の代表（理事）として「被災地調査を」ということで、皆さんから背中を押していただきました。記録係として私の友人のカメラマンを同行させました。

時間もありますので本当にかいつまんで、1点だけ……。調査に行ってきたことの中で何を伝えたいかということ、お渡しした資料の最後にもありますが、いわき養護学校の校長先生がおっしゃった、「学校が普通にあるということ、まず親御さんに伝えて、安心してもらいたかった」という言葉がすごく心に残りました。被災地に行くということで、全知P連の皆さん方から、掲示板やメールを通して、「大丈夫?」「心が痛まない?」ということ、行っている間にもいろいろな言葉を頂きました。テレビで見ているような風景・大きな被害は目に飛び込んでくるんですが、学校は本当に普通に動いているというところに、正直驚きを隠せませんでした。でも、この普通にあるということが、子どもたち、または障害のある子にとってはすごく大事なことなんだということ、あらためて再認識しました。そういった意味では、昨日、鍵屋先生の話にあった特別支援学校のBCP、被害を受けたところから普通の業務に戻していくということは、すごく大事だなということ、今、かみしめています。

そのような立場で、この後も発言できたらと思いますので、よろしくお願いします。

（コーディネーター）

ありがとうございます。関根会長は自責の念にかられたとおっしゃっていましたが、実は後藤会長と私、8月2日に陸前高田市、気仙沼市のほうを日帰りで視察に行ってきたんです。現状を目の当たりにし、津波によって町がなくなるというのはこういうことなのかということを知りました。360度見回したときに、『私たちは、ここで無力だ』ということを感じ、本当に自責の念にかられました。気持ちはとてもよくわかります。でも、本当に大事なことを持って帰ってこられたので、お伝えいただきたいと思います。ありがとうございます。

では、前田会長、お願いします。

（前田氏）

私も関根会長と同じで、どういう立ち位置を取ろうかというのは、非常に悩みましたけれども、今回出発する際に、関根会長とお話ししていたのは、多分、皆さんは報道等で非常に大変な部分、悲惨な部分はたくさん見ておられるだろうと。僕ら2人は、できればその中で明るいものを探してこようというコンセプトで行きました。

その中で、さっき関根会長がお話しされたように、普通にされているところというのは意外と報道されない。でも、なぜ普通にできているのだろうかというのが結局、いざというときのために何かをすれば良かった、何かをしておいたから良かったというヒントになるのではないかという考えで、私たちは見て回るように努めました。



幾つもいろいろと勉強させていただいたことはあるのですが、一つだけ具体的な例を挙げさせていただくと・・・例えば宮城県で校長先生にお話を聞いたのは、いわゆる宮城県は居住地交流にもものすごく力を入れておられた。そのことが結局子どもたちを守ることになったというお話を聞きました。どこの県、どこの学校でも、居住地交流というのはいろんな形でされていると思いますし、私も学校で力を入れてほしいというお話をしているのですが、実際は、先生方もなかなか足りなくて、居住地交流に力を入れられないというところが現状だと思うのです。が、宮城県は居住地交流に県から加配をされているというのを聞いて、どの程度の加配かまでは僕も聞いてないのですが、そういうシステムが居住地交流を盛んにして、それが、大げさな言い方をすると、子どもたちの命につながっている。だから、日ごろ少しの工夫をしておくことが、いざというときの子どもたちの命を救うんだなというのを、大げさかもわからないですけれども、私は感じました。

だから、日ごろからちょっと工夫をするなり、何かできることがないかなという（こういう機会にちょっと）視点を変えて見ることも必要かと。難しい言い方をすれば、「個人情報に命が優先するんだ」ということを、もう一度各学校等で持ち帰ってもらったり、あるいは、この全知連の8万人に達するとも言われる会員の力で、（今日は文科省や厚労省の方もお見えになっていますので）何かしらその施策的にも、全知P連から提案なり提言をしていただく。特別支援学校のBCPもそうですけれども、もっと身近なところで・・・いわゆる全知P連の、あそこのテーマに書かれていますように、「地域社会で豊かに生きるための『自立と支援』～生涯にわたる心のネットワーク……」。このネットワークというのは、僕は人間関係なり、いわゆる俗な言い方をすると「コネ」というところだと思うのですが、日ごろから地域でそういうネットワークやコネをつくっておくことが、子どもたちの命にかかわってくるのだと思います。単に福祉サービスや行政に頼るだけでなく、家族や近隣、お隣さん、それから自治会とか、そういうところからこのネットワークは始まっているのだということを今回痛感しました。これはやはり皆さん、もう一度自覚確認していただくことで、いろんな目がまた違ってくるんじゃないかなということを、僕としては皆さんにお伝えしたいと思いました。以上です。

（コーディネーター）

ありがとうございました。前田会長は常日ごろからPTA会長として、地域の皆さんを巻き込んでいかにPTA活動を楽しくやろうかと考えていらっしゃる方なので、居住地交流に着眼されたことがすごくよくわかりました。ありがとうございます。

それでは、ここで会場にいらっしゃいます気仙光陵支援学校の前PTA会長さんの細谷さん、いらっしゃいますか。すみませんが、手を挙げてください。それではいったん会場にマイクをお渡しさせていただきます。細谷さんから被災された当時のことをお話しいただけるということを伺っております。

IV 協議

（細谷氏）

今お話がありました岩手県の気仙光陵支援学校、大船渡市にございます。私自身は、このごろまき問題で有名になりました陸前高田市に住んでおりまして、うちのすぐ目の前が海という状況で、当然うちも、自営業だったので工場が隣接してありましたが、きれいさっぱりありません。卒業を間近にしたうちの子どもは、たまたま当時インフルエンザがはやっておりまして、学部閉鎖ということで自宅におりました。うちはそれで何とか助かったと。

うちは療育手帳Bで、中学校まで普通の学校に通つ



ておりまして、汽車通学しておりました。当時、学校が早く終わるので、ちょうどその時間帯に列車に乗っているはずだった。それが、たまたまインフルエンザで学部閉鎖ということで、自宅におりました。高等部、2名亡くなっておりますけれども、逆にそちらの方は、自宅にいたために亡くなったということです。

私自身は津波は、実際被災したのは2回目でございます、年齢がばれますが、5歳のときにチリ地震に遭いました。そのときは、うちの目の前の、ちょっと山というか、崖みたいなところに避難して、第一波が過ぎた後に安全な場所に避難したという経験がございました。

防潮堤というのがありまして、うちの目の前にあるんですが、7mです。それはチリ地震を想定した防潮堤なんですけれども、三陸津波だと10mを優に越しているということで、三陸沖が来たらば絶対にこれは超えるなという意識は前から持っておりました。案の定、やっぱり、実際に測ったわけではないんですけれども、通常海面から20m近く、うちの辺りで上がっております。陸前高田市、市街地が10mの海の底に沈んだという状況でありました。私自身は、沢というか、小さい範囲でしか見ていないので、妻の実家に避難したんですが、自宅が壊れるところも見ていませんし、市街地が壊れるというか、状況は見ておりません。映像でとかで後で見ましたけれども。

私自身は教育委員をやっておりまして、市職員、280名ぐらいいたんですけれども、70名近くが亡くなりました。陸前高田市の約1割の人が死亡とか、行方不明ということで、今、実際に何人住んでいるかわかりませんが、復興という、まだスタートに立っていないですね、現状は。今やっているのは、がれきの山を見て、「これ、何年かかるのかな」という状況です。

私自身は、さっき言いましたが、妻の実家におりまして、妻は自宅ですからいいですけれども、私は他人の家に5カ月世話になっている。で、8月9日から仮設住宅ということで、仮でも自分の家かなと、今はそういう気持ちですね。仕事も、教育委員なので、教育委員会というものがあります。その中で、教育長が亡くなりました。教育委員長が亡くなりました。教育次長が亡くなりました。学校教育課長もいなくなりました。職員、多分20名ぐらいいたうちの、4名しか残っておりません。その中で学校を再開しなければいけない。震災2日目から、私は毎日自転車で3kmか4kmぐらいある学校給食センターが対策本部だったので、毎日通っておりました。いろいろ被災した学校を調べ、全壊した学校とかも2校、床下が2校、あとは校庭が使えない。

何を言っているのか、いっぱい頭の中に巡っているんですが、4月19日に学校を再開するまで毎日通っておりました。はたと考えて、仕事をどうしようと。自営業でしたが、付き合いのあった鉄工所に、今は応援という形で5月20日ごろからそこで仕事しております。

陸前高田には本当に何もありません。このごろ仮設のスーパーがオープンしました。コンビニも10軒ほどあったのが、最初は仮設のローソンができました。で、被災したローソンが復活しました。で、ファミリーマートがこの間、3軒目です。でも、全て仮設なんです。病院も仮設です。だから、それが本当の姿にいつ戻るんだろうというのがやっぱり一番の、それは市としての復興なんだろうなという。だから、いつも全てに仮が付くわけです。だから、その仮が取れるのはいつなんだろうかなという思いであります。

ただ、私の周りというか、いろんな事業主とか、そういう人はあまり悲観的ではなくて、「またやろうな」という、そういう人が結構多いので、みんな、復活というか、したいなというふうに思っております。みんな「大変でしょう」と言うんですが、確かに大変なことは大変です。ただ、普通に生きるのも大変なわけで、考え方として「家がなくなっただけか」という発想でいかないとどうも滅入ってしまうわけで、これからも目の前を、直前を見ながら生きていこうかなというふうに思っております。とりとめのない話ですみません。

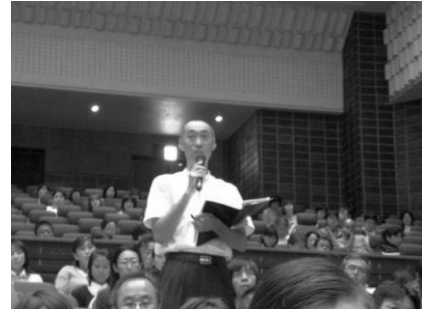
(コーディネーター)

細谷さん、ありがとうございました。大変な被災地の状況で、まさに津波に直面されて、復旧に向かってご努力されている姿、会場の皆さん、確かににお耳にされていたと思います。もう一度会場の皆さん、細谷さんに、あるいは被災地の皆さんに向けて、拍手をお願いしたいと思います。

ありがとうございました。いったん会場にマイクが行きましたので、時間がないものですから、もうひとつぐらい、パネリストの皆さんにご質問のある方、いらっしゃいますか。はい、ありがとうございます。お願いいたします。

(森田氏)

静岡から来ました、静岡御殿場特別支援学校の森田です。貴重な体験のお話、ありがとうございました。お話を聞いて、やっぱり防災に関してはやっていけなくちゃいけないなということはよくわかったんですけども、実際、当校PTAで言うと、例えば専門部、研修部、広報部、施設部、進路対策、地域といろいろあります。昨日、分科会で聞いたPTAの活動も、これに近いような部とか委員会があるんですけども、実際に防災をやっていく部というのは多分、PTAの組織の中にはほとんどないと思っております。こういうことをやらせていくのに、どのように取り組んでいけばいいのか、もしパネラーの皆さんが、こう考えているというようなお考えがございましたら、ぜひお聞かせいただきたいなと思います



(コーディネーター)

それでは、パネリストの皆さん、挙手をお願いします。私はPTAの活動で防災に取り組んできたという方。前田会長、お願いします。

(前田氏)

誰もいないみたいなので手を挙げてしまいました。私、滋賀県長浜養護学校ですが、うちの学校の場合、この間、研修部で長浜市の防災の方を呼びまして、一度勉強会をやりました。そのときにやったのは、多分かなりの市町村でやっておられると思うんですけども、長浜市の場合、家族見守り隊だったかな。いわゆる個人情報の関係でなかなか難しいので、逆に社会的弱者と言われる独居老人であるとか、障害児・障害者の方が、自ら何かあったときには助けてくださいという名簿を行政が今、作っています。その説明を、まず行政から来ていただいて、研修部でPTAの皆さんにやったり、あるいは、もう少しこれから出てくるようなことは、僕はPTA本部でやろうと思っています。参考にならないかも知れないですけども。

(コーディネーター)

ありがとうございます。私の立場から申し訳ないんですけど、私は卒業しましたが、所属しておりました学校で、防災には3年ほど前に取り組みました。そのときには、まずPTA本部でやっていこうということで、PTA本部から発信していきました。町会、自治会、障害者団体、それから区の知的障害者育成会に声かけをして防災訓練をしました。育成会の中に「あんしんネット・心のバリアフリーすすめ隊」という障害児者の理解・啓発をしている活動があり、そこをお願いして、また、PTA本部でも何となく対抗意識が出てしましまして、「本部見守り隊」というものを急ぎょ作成しまして、一緒に理解・啓発をしながら、特別支援学校が二次避難所（福祉避難所）として指定されていたので、それを地域の方にまずお知らせし、地域の皆さんの中にいらっしゃる障害者の方と一緒に防災訓練をしました。

防災訓練に取り組んだ後に、二次避難所をもっと行政に伝えていく必要があるよねということが障害者の皆さんからのご意見にありましたので、次に「防災シンポジウム」を、PTA本部主催で開きました。そのときには、地域の中にどのような支援者がいるのかということ保護者が把握して、こんなにすごい支援者がいるんだということも、行政の方に見ていただきました。皆さんの受け取り方はそれぞれなんですけれども、やはり今自分たちがすべきことは何かと思ったときに、PTA本部から発信することも一つなのかなと思います。前田会長と同じような視点だったと思いますが、そこからまた、私がやってみたいという自発的な会員さん、あるいは保護者が現れるといいかなと思います。お答えになっていないかもしれませんが、いかがでしょうか。

(森田氏)

はい、どうもありがとうございます。

(コーディネーター)

貴重なご質問、ありがとうございます。それでは、時間が本当に限られた中で申し訳ありませんが、パネリストの皆さんで、これだけはもう言うておかないと帰れないということ、本当は1分差し上げたいんですけど、30秒ですね。30秒で、これだけは言うておきますということ、菊池さんから順番にお願いします。

(菊池氏)

岩手の菊池ですけれども、これからの大きな課題として、卒業後の進路先の確保が非常に大きな問題です。津波によって沿岸部の企業が倒産、あるいは事業中止ということで、本当に卒業生の進路先をどうつくっていくか、確保していくか、これからの大きな課題だと思っています。以上です。

(工藤氏)

先ほど、ご質問の中にもありました、防災とかの取り組み。まだ、これからよということでの今回の震災でしたので、今回の記憶・情報をどのように次に持ち込めるか、そこまでを含めてどのようにとらえられるかということが、今、私のPTAの活動の中での課題になっております。こういった形は多分、それぞれのPTAの皆さまも同じような状況にあるのかなと思いますので、同じような一つ一つの課題に向かって検討を続け、その情報が共有できればなということで考えておりました。

(佐藤氏)

養護学校のPTAの人たちの情報伝達というところが、どういうネットワークをつくっていくかというのが本当に必要だなと思っています。あと、養護学校が避難所になり得るかどうかというのはちょっと難しいんですけども、福島県の事例では、養護学校が避難所にならなかったんだけど、近くの避難所に養護学校の先生がいっぱい応援に入っていたよという話を聞いたので、そういうかかわり方もあるのかなと思います。

(関根氏)

とにかく、何度もお話が出ていますが、地域の資源をどんどん活用することだと思います。ちょっと言い方には語弊があるかもしれませんが、協力してくれる方を探すという考え方ではなく、どの団体とか、どの個人を利用できるのかという、ちょっとあくどい考え方のほうが、いろんなアイデアが出てくると思います。周りで言えば、消防団もあるし、商工会議所もあるし、JCもあるし、ライオンズクラブもロータリークラブもある。あの人たちをどうやって利用してやろうかぐらいの気持ちで考えていけば、アイデアってどんどん出てくるかなと思います。あとは、そういうことを全知P連の中で……、アイデアっ

てやっぱり1人とか10人で考えるよりも、100人、1,000人集まって、8万人のアイデアが集まれば、思いもかけないものが出てくると思うので、そういったものをどういうふうに構築していくかというのが全知P連の課題としてあると思います。そういうことを皆さんと一緒に考えていきたいと思しますので、よろしくお願いします。

(前田氏)

私からは一言だけ。想定外を減らそう。以上です。

(コーディネーター)

ありがとうございました。それではパネリストの皆さんから大変貴重なキーワードを幾つも頂いています。学校の避難所としてのポテンシャル、活用部分を考えていかなければいけないところであること。また、自助の部分では家族の決め事。そして、サポートブック、SOSファイルを含んで、どのような在り方がよいのか。また、情報の点ではメールの一斉発信がどのようにあればいいのか。そのようなところを全部ひっくるめて、鍵屋先生！全部ひっくるめて、お願いいたします。

V 助言

(鍵屋氏)

全部ひっくるめて5分で話をするという、大変楽しい宿題を頂いたところなんです。ずっと被災者の方々のお話を伺っていて、私も陸前高田は3回ほど伺っています。話を伺えば伺うほど、僕たちはちゃんと聞いていないという思いに突き動かされるというんですかね。例えば平常時のときに、相談支援ってたくさんやりますよね。平常時のとき、子どもたちは何に困っているか、保護者の方、ご家庭の支援をなきゃいけないねとって、いろいろやっている。災害時はもっと必要なはずなのに、逆にそれができないでいるというところで、私たちは災害被災現場ともっともって向き合って、もっともってお話を聞かせていただかなきゃいけないのかなというふうに、あらためて今日も感じました。おそらく、本当に短い時間で今日のパネラーの方はお話をしてくださいましたが、本当は3日間ぐらいずっと話を聞くと、少しはわかってくるという、そういうレベルのことなのかなと思っています。



その中で、今、貴重なお話を頂いた中から私なりに考えたことを申し上げたいと思うんですけど、今の災害は厳しいです。昔のほうが、実は災害に対しては対応力があったんですね。自給自足でしたし、ライフラインもなくても、電気なんかなくて、みんな生活していたわけです。ですから災害があった後でも、自分のうちがつぶれなければ、すぐ次の日から普通の生活に戻っていたんですね。トイレの心配だっけなくて良かったわけです。ところが今は、そういった便利さというものが突然断ち切られたときに、いきなり生活が立ち行かなくなるという状況にあります。今さら不便な生活に戻ることにはできませんから、昔の災害に比べて、まずどれだけ厳しくなったのかというところの、その厳しさというものを見据えて、それを少しずつ補っていく。例えばトイレは非常に問題が難しいです。トイレができなくなったら、被災地でもお話を聞くと、仮設トイレの前に50人とか100人並ぶんですよ。そういう状況の下で、できますかという話なんです。そういうトイレの問題を解決していかなければいけない。電気がつかない。暖房は、冷房はない中で、じゃあどうやって準備をしていけばいいのかとって、昔の災害と比較して、今の厳しい状況についてどう準備していくかということは大事なかなと。

一方で、新しい良い武器もあるわけです。例えばメールとか、そういったものでお互いの安否を確認できるということは、昔はなかなかできなかったことが、今、うまくいけば、特に衛星電話など上手に使える、あるいは非常用電源を上手に活用したりすることで、電

気を補ったり、また新しい支援ということで、ボランティア活動であるとか、支援物資が大量に届くという、そういう新しい市民の連帯感というものも生まれてきているんだろうと思います。そういった長所を活用しながら、災害に対する準備をしていくということが大事だろうなと思ひまして、まず最初に、昔の災害と比較して、長所を生かし、短所を補っていかうと。

そのときに考えるべきことは、100点を狙わないということ。合格点を目指そうと。その合格点も、高い合格点じゃなくて、60点。例えば何だろうなと考えたときに、十分な食事はできないけれども、アレルギーがあって食事が取れないという子の準備はしてあるよ。これ、合格点ですね。お水も、あらゆるところには十分に使えないけれども、飲み水だけは何とか確保しているよといった、そういう合格点を目指していかうと。ちょっと昨日もいろいろ打ち合わせをしていると、100点から見てここが足りないんじゃないか、あそこが足りないんじゃないかという議論にどうしてもなりがちなんですけど、そういうことを、もう100点を目指していくと、お互いに完璧を目指し過ぎて前に進めないという状況が生じてきます。

今日、工藤さんの資料で、まずPTAから災害緊急時物資備蓄計画ということで、暫定措置のお願いということで、まずPTAから始めちゃいましょうと、やれるところからやっちゃいましょうという、そういう取り組みというのは、もう本当に拍手です。素晴らしいなと思ひました。まず自分のできることから始めましょう。それから学校単位でできることに取り組んでいきましょう。で、そういう取り組みが幾つか進んだときに、やっと制度ができてきたり、さらに60点から100点を目指す活動に進んでいくのかなと思いますので、今日お集まりの皆さま方には、まずご家庭で、ご自分で、できることにまず取り組む。そして、今日お話しいただいたことを通じて、学校で取り組めること、そんなに無理をしないで取り組めることをまず話し始めるというところからお始めいただければいいかというふうに考えています。

3番目が、何が何でも学校教育を再開することですね。昨日、BCPということで、事業継続、学校教育継続と言ってもいいかもしれません。それが大事だという話をさせていただきました。今日も被災地の方から、普通に学校があることがいかに大事かというお話をいただきました。そして学校を早期再開することが、子どもたちだけではなくて、保護者の生活再建にもつながっていくという観点から考えれば、まさに復旧復興のシンボルは学校教育の再開。もうここに心を一つにして、学校教育を再開というところに向けて、保護者の方と学校と教育委員会と力を合わせて、1日も早く学校教育を再開するんだということが大きな、大きな柱になるんだと、今日あらためて思ったところでございます。

最後に、福島県が今、非常に厳しい、学校教育の再開こそが大事だといった柱があるときに、全員で避難をしなければいけない、学校にいられないという、そういう福島県に対して、もう本当に全国、全世界が心を寄せて、決して孤立させてはならない。福島を一人にするなという、そういう思いでいっぱいですね。これからも福島県、被災地もそうです。私たちが力を合わせて、子どもたちを守っていかなければ誰が守るんだという思いを、皆さんと共有したいと思ひます。どうもありがとうございました。

(コーディネーター)

ありがとうございました。パネリストの皆さま、本当に今日は貴重なお話をありがとうございました。助言者の鍵屋先生ありがとうございました。つたない進行で大変申し訳ありませんでした。限られた時間の中でのパネルディスカッションでしたので、是非この後は、皆さまの地域で発展させていただけるように願っております。ありがとうございました。



VI 閉会